

ラフカディオ・ハーン渡米 150 年記念事業関連記事 2019-2020

1. NHK BS プレミアム「オープンマインド～小泉八雲が愛した日本の原風景～」 2020/1/13
2. 企画展関連連続レクチャー「ハーンとアメリカ」最終回 2020/1/11
3. 「ハーン渡米 150 年記念事業を終えて」小泉凡 山陰中央新報記事 2019/11/20

1. TV 番組 NHK BS プレミアム 2020/1/13(月) 22:45～23:30

オープンマインド～小泉八雲が愛した日本の原風景～

出演

語り：佐野史郎

朗読：ピーター・バラカン

内容

『怪談』などの作品で、自然やくらしの中にも霊的なものを感じる日本人の多様な価値観に深いまなざしを向けた小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）。いま、八雲が日本に見いだした精神が、トランプ政権誕生や移民排斥など「不寛容」が渦巻く世界で「オープン・マインド」として見直されている。その精神を培い、島根県各地に今なお当時の姿で残る「日本の原風景」を 4K 映像で記録。数々の名作の一節とともに八雲の心の航跡をたどる。

(NHK のホームページより)

※NHK オンデマンドで見逃し配信中（購入期限 1/27）

(八雲会ホームページより)

2. 企画展関連連続レクチャー「ハーンとアメリカ」

シリーズ最終回となる今回は、小泉凡館長の「ハーンとクレオール文化—ハーンを魅了したクレオールの魅力」 2020/1/11(土)





小泉八雲記念館

ランドマーク・名所旧跡・「いいね！」2,577件・18時間前・

ご報告とお礼が遅くなりましたが、企画展関連連続レクチャー「ハーンとアメリカ」が無事に終了しました。

シリーズ最終回となる今回は、小泉凡館長の「ハーンとクレオール文化—ハーンを魅了したクレオールの魅力」でした。

ニューオーリンズとマルティニークでクレオール文化の中に身も心も浸りきっていたハーンは、文化の接触、混淆、変容、創造という現象にクリエイティブなエネルギーを感じ、魅せられていきました。

W.K. MacNail が “Lafcadio Hearn, American Folklorist” (1978)の中で述べているハーン評価にうなずけます。

「奇怪なるものへの関心が、当時、顧みられることのなかった庶民の音楽や民間伝承への関心を喚起し、少なくともアメリカにおいては、民俗研究の先駆的な役割を果たしたことを重要視すべき。」→これが、日本に来てからの著作の数々につながっていったことは間違いないでしょう。

昨年10月にアメリカで行った記念事業 The Open Mind of Lafcadio Hearn in the USA の報告、ニューオーリンズの文化的特色をめぐるエッセー、クレオールのことわざと料理本、マルティニークをめぐる紀行文と小説、沖縄の夢(クレオール性を求めて) という興味深い内容で、目からうろこのお話でした。

今回のレクチャーに参加して下さった皆様、本当にありがとうございました。すべてのレクチャーに参加して下さった方もあり、うれしい限りです。

企画展の開催中に、5回の連続レクチャーの内容を簡単にまとめて、皆様にお目にかけることができればと願っていますが、もうしばしお時間をください。

では、次の企画展では、どんなレクチャーとなりますでしょうか？お楽しみに。

「ハーンを慕った二人のアメリカ人」は、6月7日(日)まで続きます。皆様のお越しをお待ちしております！

(八雲会 facebook より)

3. 「ハーン渡米150年記念事業を終えて」小泉凡 山陰中央新報記事 2019/11/20



ニューヨークで「怪談」の朗読パフォーマンスを披露する佐野史郎さん(左)と山本恭司さん＝八雲会提供



シンシナイでハインの弟ジェームズの子孫たちと記念撮影する小泉凡さん(前列中央)＝八雲会提供

ニューヨークシンシナイ、二ユーオリンスでのハイン渡米150年記念事業を終え、11月初めに帰国した。10日間の旅で、主役を務める松江市出身の俳優佐野史郎さんとギタリスト山本恭司さんは、3回の朗読パフォーマンス「怪談―恐怖の底より聴こえる救いの呼び声―」を、筆者はそれに先立つミニレクチャーと二ユーオリンスの日本クラブとノーザン・ケンタッキ―大でのレクチャーを行った。日本クラブでは、七沢菜波さんの書と恭司さんの音楽によるパフォーマンスも行われた。

開催地ごとに客層や反響に大きな違いがあったが、パフォーマンスに感動し、日本文化のイメージを感得できたことは、実に有意義だった。

ハイン渡米150年記念事業を終えて

日米基層文化への思い紹介

〈小泉 凡〉

イナミズムを感じてもらえたようだ。またハインが明治の山陰・日本に見いだした無形の日本文化に魅了されたというオ―テイエンズの声は関係者の励みとなった。そして、この節目の年にハインがオ―ブン・マイ―ランドでみた日米基層文化への温かいまなざしをしっかりと紹介できたことは、実に有意義だった。

ニューヨークのモリガン・ライブラリーやメトロポリタン美術館でも、このイベントにあわせてハインの初版本が展示され、二ユーオリンス・ヒストリカル・コレクションでは写真家エバレット・ブラウン氏の瀧版写真展「オ―ブン・ライフをもとめて―ラフカディオ・ハインの日本―」も開催された。この旅で二つの意外な出来事

と感動があった。一つは、ハインの唯一の同母の弟ジェームズの子孫約20人が、シンシナイでの朗読公演の前夜、「ハイン・ファミリー」の集いを開催し、翌日のイベントを盛り上げてくれたことだ。ジェームズは兄のラフカディオとは別々に育てられたが、16歳の時、同じようにオハイオ州に入植。その後、ミシガンに移って農場を営み、ま

ずまず成功した。初対面のジェームズの直系の孫、クレグは今も先祖が拓いたフィールドで同じ作物を作る日々を送っているという。詠嘆の念が込み上げられた。

もう一つは、ルイジアナ州・テイボードにある二コールズ州立大を訪問した際のこと。この大学は全米でも屈指のシエフ、ジョン・フォールズを看板教授とし、クレオール料理の学びで学位が取得できる。ジョンさんは、ハイン著『クレオールの料理』を敬愛し、今も教科書としている。「ハインのレシピは風味を五感で表現し、食べた人の喜びや感動まで伝えている」からだという。毎年、全米から選ばれたクレオール料理のベスト・シエフや優れたクレオール料理の紹介者に「ラフカディオ・ハイン賞」を贈り、すでに26人が受賞。ハインの肖像を囲むように受賞者26人の写真が掲げられた部屋で、ジョンさんプロデュースのフルコースを食べた時の驚きと喜びはひとしお。130年余り前のハインの著書が現代のシエフの魂を揺さぶり、未来の料理人を夢見る学生たちへ混濁文化・クレオールの精神性を伝えていくことを知らされたからだ。

この記念事業に「尽力いただいた日米双方の関係者・関係機関に心より御礼申し上げます。(小泉八雲記念館館長)